

中学生・高校生を対象とする 作文・小論文コンクールの審査結果

金融広報中央委員会では、中学生や高校生に金融・経済への関心を高めたいことを目的として、作文・小論文コンクールを開催しています。厳正な審査の結果、2014年度は以下の方々が上位に入賞されました。入賞作品のうち、高校生小論文コンクールにおいて、金融広報中央委員会会長賞を受賞した『「生活費」の難しさ』の全文を掲載します。

第47回「おかねの作文」コンクール特選

金融担当大臣賞

『お金の重み』 小林 尚子（京都府 京都市立嵯峨中学校 3年）

文部科学大臣賞

「私の価値」

岡本 晋（東京都 東京都立大泉高等学校附属中学校 3年）

日本銀行総裁賞

「お金の大切さとためる楽しさ」

松田 亜久里（神奈川県 藤沢市立片瀬中学校 3年）

日本PTA全国協議会会長賞

『おかねと自分』 舟橋 龍観（愛知県 犬山市立東部中学校 1年）

金融広報中央委員会会長賞

「お金から広がる感謝の輪」

加藤 小百合（愛知県 名古屋市立東星中学校 2年）

第12回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール特選

金融担当大臣賞

「地元商店街の未来」

高森 日奈子（岡山県 岡山県立岡山南高等学校 3年）

文部科学大臣賞

『消費者の選択』 津牧 美葉子（京都府 同志社女子高等学校 1年）

日本銀行総裁賞

『受け継がれる想い』 橋本 有加（兵庫県 雲雀丘学園高等学校 2年）

全国公民科・社会科教育研究会会長賞

「私の思い描く笑店街」

大坪 右弥（京都府 京都府立京都すばる高等学校 3年）

金融広報中央委員会会長賞

『「生活費」の難しさ』

塩地 里佳子（神奈川県 神奈川県立川和高等学校 1年）

* 全入賞者の氏名などおよび上位入賞作品は知るぽるとホームページ (<http://www.shiruporuto.jp/>) でご覧いただけます。

「生活費」の難しさ

神奈川県立川和高等学校 1年
塩地 里佳子

私は現在、父と二人で暮らしている。家事は二人分だけなので慣れてしまった今では大した負担ではない。だがそれ以上に、私は自分のお金の管理が不安であった。

私には二種類のお金が渡されている。まずは毎月貰える自分のお小遣い。これは自分の趣味や友人との交際費にあたる。そして生活費というものが別で渡されている。生活費といっても私の手元に必要なのは、食費や日用品のお金くらいだ。しかし実際に預けられてみると、同じお金のなかにお小遣いと比べ物にならない程、使うのに緊張が伴うのだ。

私はこの二種類のお金を管理するにあたって、心がけていることが三つある。

まず大前提として、自分が何にいくら使ったのか、いくら残っているのかを正確に記録するということだ。お小遣いも生活費も一回の出費がそんなに大きくはないため、こまめに記録しないと、気づいたら足りなくなっていた、などということになりかねない。

以前はレシートを失くしてしまうことなどしょっちゅうだったし、財布に今いくら入っているかも把握しようとしなかった。だから父から1か月分の生活費を預かったときには、自分に管理できるのか怖くなってしまったものだ。だからこそ、お金の動きを目に見える形で確認することが大切だ。家計簿というほどのものではないが、レシートを整理して残額をメモしておく、貰った額も記録しておく、この小さな習慣にどれだけ支えられていることか。今まではいつの間にか減っていたお小遣いも、記録を始めてからは次に貰えるまでの日数を考えた計画的な使い方ができるようになった。

二つ目に、節約するということだ。記録をつけ始めて、今まで気に留めていなかった1円単位の価格の差がとても気になり出したのだ。今までは真面目に見たこともなかったスーパーの広告を、気づいたら見比べて買い物のルートを考えたりしていた。小さい頃は母がそうしているのを見て、どうせ10円くらいの違いなら、面倒だから1か所で済ませればいい、なんて思っていた。それが今では自動的にそうしている。友達と歩いていても、ふとしたときに店頭の商

品の値段をチェックして家の近所の店と比べたりしてしまう。なんだか恥ずかしい気もするけれど、1円でも安い物を買うことは賢いことだと思う。これからずっと積み重ねていく節約が1年後には、10年後にはきつと私の助けになるだろう。また、お小遣いの使い方にも変化があった。節約の積み重ねは1円、10円ずつだけど、無駄使いのそれは100円、200円ずつである。学校帰りに友達と寄り道をする機会を減らしたのは、家事と勉強の時間のためもあるけれど、やはりお金の大切さを強く感じたからでもある。その代わり、今日は遊ぶ、と決めたら思いっきり遊ぶ。ただしあらかじめ使うお金の上限を決めて出かけるようにしている。その結果、今までは毎月あれば使ってしまったお小遣いが余るようになっていた。今までいかに浪費していたか思い知った。

そして三つ目は、お小遣いから払う物と生活費から払う物を明確に決めておくことだ。これは、初めに父と相談して細かく決めておけばよかったのだが、そうしなかったために迷ってしまったことがある。例えばお菓子は食費から払ってよいのか。これはまだ

わかりやすくて、お菓子を食べるのは私だけなことで、食事ではなくて食べたいだけであることからお小遣いから払う。しかし当初買物で悩んだのは主に日用品だ。シャンプーや日焼け止めなどは父と共有しないが今まで自分で買っていた物ではない。さらにそういった物はどこまでが必需品といえるのかわかりにくく、生活費から出してよいものか判断がつかなかった。父とよく話し合った結果、細かく区別をつけたので今は迷うことはほぼなくなった。ここから私は、使い道のはっきりしないお金は持っていない方がよいとわかった。生活費はあくまでも父から「預けられた」お金であり、安心して預けてもらうためにもお互いの認識にずれをなくすことが必要だと感じた。今も、少しでも迷ったらすぐに確認をとるようにしている。

父との二人の暮らしが始まってからまだ数か月だが、お金に対する考え方は既に大きく変わった。今まで何も考えずに月に一度入ってきてから出ていくだけだったお小遣いが、管理された計画的な使い方ではたまっていく。まさか高校生のうちに生活費をやりくりするとは思わなかったが、

買い物はこんなにも頭を使うものだとして少し大人に近づいた気分だ。将来一人暮らしを始めたら、電気、水道、ガスや家賃、その他にも自分の携帯電話の料金などまで管理しなければならぬ。大学生になったら一人暮らしをしてみたいなんて思っていたけど、お金の管理の大変さや、実家暮らしの方が遥かに経済的であることまで頭が回るようになり、考えを改めた。高校生になってほとんどの場所で大人と同じ料金を払っているけれど、私達はまだまだ親の元を離れられないと知った。父は帰りが夜中になることがほとんどなので、一人暮らしのように感じることはある。しかし、もし父が家にいなくて、たとえお金だけがあったとしてもきつとまともに暮らしていけないと思う。料理や洗濯が手早くできるようになって、ごみの日を覚えて、戸締まりを絶対に忘れな

い習慣がついても、お金をすべて自分でやりくりしろと言われても無理である。両親がたまに税金をどこに振り込むとか、保険金をどうするとかの難しそうな話をしていたが、大人になっただけでそういったことも考えなくてはいけないと思うと、今から心配

だ。高校生の今、お小遣いと生活費という二種類のお金を管理することは、望んでこうなったわけではないが実は恵まれた経験なのかもしれない。

生活費もお小遣いも今は同じ財布で持ち歩いているが、私の目には異なるお金として見えている。常に持っているお金を把握するようになったし、預けてもらえらるということはそれなりに信頼されているということだと私は思っている。それを壊さないためにも、預けられた責任を持つてお金を管理していきたい。



「おかねの作文」コンクール



「金融と経済を考える」
高校生小論文コンクール